

V 教科への導入の試み

—倫理社会の場合—

児 嶋 文 寿

導入は、毎時限の授業での重要性はよく問われるが、はたして、教科そのものの導入は、十分に考えられているだろうか。このような疑問から、小論では「倫理社会という教科への導入」を、「人間性の理解」の一部を「人間とは何か」というテーマのもとに、試案として再構成して考えてみたい。

1. 問題の所在 —生徒のアンケートから—

毎年、第一回目の授業では「倫社アンケート」（附記参照）を行なっている。このアンケートの主な内容は、①倫社という課目のイメージ、②人間形成の理解③人間形成と学校の関係、④現在の関心事（趣味的な・社会的な）等の調査である。このアンケートは「倫社」という課目が、いかに導入を必要とするかを物語っている。以下、簡単に本年度4月のアンケートより直接生徒の言葉をひきながら、その傾向をのべてみたい。アンケートの①については生徒は、この課目については、「中学の道徳のようなもの」というイメージが強く、はては「固苦しくて、ややこしくて、何のこっちゃ」というものまで現われてくる。また②については「完成された人間の教育」とか「環境などの影響を受けながらの精神的成長」等、辞書的、また客観主義的、受身的な理解が多く、それに関連しての質問「自分をどのような人間に形成したいか」については「心を広くもてる人間」「正直な人間」「他の人から信頼される人」など、一般的・徳目的な羅列に終り、質問のせいもあるが、具体性、特殊性がみあたらない。また③については、非常に多いとまではいえないが「学校は勉強をするところで、ほとんど関係がない」というような内容が目立ち、極端には「学校は人間形成に役割を果すようなことをしているんですか？」というようなものまである、多くは果してとしたら、クラブ活動を中心にした生徒間、生徒と教師の人間の交渉にその意義を認めている。

以上のような傾向は、この三カ年間のアンケート結果では、大きな変化はない。すなわち、生徒は、学校を人間形成をはかる場所として、はっきりとらえていないこと、また、まして、学校で教わる教科が、直接それに関係するなどとは、とても考えられないこと、そして人間形成の意味を、まわりの環境の影響による形成、完全な人間を作るための外からの作用としてと

らえ、自己目的的に追究していく姿勢が弱いということ、たとえそれがあったにしても抽象的なレベルにとどまり、現実的、社会的な把握は皆無に近いということである。

このような生徒の意識状態を前にして、一課目にすぎない倫社が「人間尊重の精神に基づいて、人間や社会のあり方について思索させ、自主的な人格の確立をめざし、民主的で平和的な国家や社会の形成者としての資質を養う。」ことは、大変な難題とはいえないだろうか、だが、わけのわからない教科ではありながら、それ故に、現在の生徒の期待はあり「現在の私たち高校生というふうに、私たちが直接考えること、身近かなことを主にしてほしい」という要望「人々がつくっている社会とはどのようなものなのか、そしてそこでどのように生きていったらいいのかということや学んでいく学科じゃないのかな……？」という倫社のイメージも存在する。この数少ないイメージに起点をおいて、上記の一般的な生徒の考え方や姿勢を、人間形成こそが学校教育の目標であるということ、教科は各々それに奉仕することという考え方に、また人間形成を積極的、意図的な自己形成として把握させること、少なくともそのような「導入」の一つとすることを私は「教科としての倫社への導入」の重要な課題として、生徒のアンケートは提起していると考えられる。

以下のその主題と内容である「人間とは何か」は、「人間性の理解」の内容の一部に、この「倫社への導入」の課題をかみ合わせた「試案」であり、また「私案」でもある。

2. 導入「人間とは何か」の構想

1.にのべた問題意識から、「導入」の学習主題を、「人間とは何か」というテーマにし、その内容を、①「人間と労働」の学習を通し、人間労働の目的志向性②「人間と言葉」を通して人間の認識——とくに理性的認識の意義、③「人間と自然、社会」を通して、人間による自然的・社会的環境の支配・利用・その道具としての科学・知識の意味、の把握として設定した。以下、順を追って概念的ではあるが、その内容を示し、留意点についてのべたい。

① 人間と労働

④ 人間と猿、動物とのちがい（発問）

- ㊦ 猿から人間への進化（両手の解放，火の使用，道具の使用，言葉の使用，労働）
- ㊧ 労働の持つ意味（成果の享受，労働の過程における精神的・肉体的発達，協業・協労の意味）
- ㊨ 人間的労働（意識的労働，道具の使用，自然の漸次的支配，社会的性格）
- ㊩ 学習と労働

内容は以上であるが，人間の特性を，その本源的な労働との関係においてとらえさせることが課題である。火，道具，言葉の使用については，中学で既習しているので，それを労働と結びつけての把握にしてい，そのうえで，意識的労働に重点をおき，その点での動物との相異を明確にとらえさせる。㊩は，以上の学習を土台にして，そのまとめ，具体化として，‘生徒の労働としての学習’という風に，問題をたてて検討させ，学習の‘意識性’‘目的志向性’を考えさせる。

② 人間と言葉

- ① 人間と動物の言葉（発問）
- ㊰ 条件反射（無条件反射と条件反射，第一信号系と第二信号系，感性的刺激——具体的，直接的，個別的，「信号の信号」——抽象的，媒介的，普遍的，「信号の信号」の意義——超時間・空間的性格）
- ㊱ 人間の認識（感性的認識と理性的認識，感性的認識——具体的，直接的，個別的，理性的認識——抽象的，媒介的，普遍的，感性和理性）
- ㊲ 人間のタイプ（芸術家型——第一信号系タイプ，思索家型——第二信号系タイプ）

以上，①の学習から「言葉」を引き出し，その特徴から展開し，人間の認識の特性を学習することが中心であるが，それを通して，理性と感性，理性的認識の把握に重点をおく，自己の対象化，自我の確立が未分化，またはその分岐点にある者が多いこの学年には，理性を感性から区別することの意義は大きい。㊲は，その理解を深める具体例，人間のタイプを区別することに，生徒の興味を集中させず，むしろ両者の役割のちがいに注意させる。

③ 人間と自然・社会

- ① 科学とは何か（発問）
- ㊳ 科学の役割（自然科学の役割——本質・法則の把握とそれによる利用・支配，自然科学と社会科学——その相異と同一性）
- ㊴ 社会科学の役割（社会科学の後進性，日本における後進性，社会科——地理，歴史，政経，倫社）
- ㊵ 自然的，社会的環境の把握とその利用
- ㊶ 社会科学は，可能か？（公害）
- ㊷ ①については，科学＝自然科学という把握は，現在

の生徒には圧倒的に多い。従って，自然科学の役割をテコにして，社会科学の役割，その重要性，そして，両者の意味を，㊰の理性的認識とつなげさらに，その意義を広げることがねらいである。また，㊱については，1.でのべた生徒の学校観，教科観の変革を試みるため，その変革が課目，倫社の把握，位置づけにも関係する。㊲は，まとめの討議題，例としては現在，生徒にとっても大きな関心事である公害は好適。

以上，①，②，③の構成により，人間行動の目的志向性，その核としての理性，さらに，その内容を培うものとしての科学，知識——その土台としての学習，教科，学校という生徒の認識のすじを考えた。

3. 反省と問題点

この「教科への導入」を前提にして考えると，以後の倫社の学習内容は，①の個別史としての生徒の「形成の条件」，その中における「青年期」の問題，②の歴史的展開としての「ギリシャの思想」，②に③の歴史的展開を加えての「近代ヨーロッパの思想」，③の具体的展開としての「現代社会の問題点」と「現代の思想」，以上の日本，東洋の場合というように，有機的に，2，3の例外を除いて構成できるように思う。（この点は，課題として残すことにしたい）

以上で概略は示したが，問題点としては，ここまでにあらわされた私なりの倫社という課目のとらえ方は，社会科学入門的な方向を中途半端に志向したにすぎないかもしれないし，また，人間の特性以下の内容を，客観主義的にある程度把握させることは可能であっても，生徒に人間形成を意図的自己形成として，積極的にとらえ直させる役割を果しうるかについてはやはり，主知主義的な性格を脱し切っていないのかもしれない，またその内容についても「身近かなことを主にして欲しい」という生徒の要求に即した教材化へはほど遠く，概念の羅列のままに終わっている，これらの点を今後の検討の課題として，卒直な御批判をお願いしたい。いずれにしろ私は，倫社という課目を，人間形成——自己の対象化と客観化による自己変革の自覚化——変革のための社会的，具体的環境の把握——それへの積極的対応——対応を通しての自己変革というサイクル——の「導入」として，考えたいと思っている。小論は，そのような考えに基づいた「私案」にすぎない。

【附 記】

参考のために，以下本年度の「倫社」アンケートとそれを利用しての従来の「導入」を示しておく。

① 「倫社アンケート」（47年度）

1. 倫理・社会とはどのような課目だと思いますか。

2. よく使われる人間形成とは、どのような意味だと思えますか。
3. 自分をどのような人間に形成していきたいと思っていますか。
4. 現在、学校は自分の人間形成にどのような役割を果たしていると思えますか。
5. 尊敬している人物、好きな個性をもった人物がいたら書きなさい。(理由も)
6. 愛読書、好きな本があったら書きなさい。(作家でも可、最近読んだ本でも)
7. 現在、もっとも関心をもっていることを書きなさい。(一般的に)
8. 現在、もっとも関心をもっている社会的出来事を書きなさい。
9. 授業への要望、希望、とり入れて欲しいことがあれば書きなさい。(以上)

◎ 従来の「導入」

テーマ・「学校と倫社」

- ① アンケート結果より、(アンケートからの意識の特徴の指摘——意識、興味の多様性、マスコミとの関係、倫社のイメージ、人間形成の抽象性、学校のイメージ等)
- ② 学校とは何か(発問)
教育とは何か(〃)
- ③ 学校教育の本来的目標(形成と学校教育の相異、人間の形成、教科指導と生活指導、知育、徳育、体育、美育——全面的な発達)
- ④ 倫理社会(戦前の修身、教科書の説明)
- ⑤ ケネディ家について

以上であるが、アンケート結果については、具体的数値を示しながら、後の展開への伏線を考慮しながら特質を指摘。②については、生徒は、真正面から、この問題を考えたことはあまりない。彼等とのやりとりを通して、③の内容を準備していく、また、④では、環境による総合的な作用と対比させながら、学校教育独自の本来的目標を、また、⑤では、「修身科」と対比させ、倫社の中味を、①、社会学的心理学的側面、②、社会思想史的側面、③、哲学思想史的側面、と大きく三点に分けて簡単に説明、また、⑤については、余談的に、ケネディ家の歴史とケネディの課題と現実を説き、生徒の家、地域、国の歴史との関連を、漠然と提起しておく。

【参考文献】

①については

- ・エンゲルス著「猿から人間への進化における労働の役割」青木文庫。
- ・クラブ著(大橋精夫訳)「マルクス主義の教育思想」お茶の水書房。
- ・小川太郎著「教育と陶冶の理論」明治図書。

②については

- ・アストラチャン著(柘植他訳「パブロフ」岩波新書。
- ・芝田進午著「人間性と人格の理論」青木書店。

③について

- ・高島善哉著「社会科学入門」岩波新書。
- ・戒能通孝著「いかに生きいかに学ぶか」講談新書。

その他。

- ・岡村、むの著「1960年」三省堂新書。